INTERVIEW

阪本順治

『どついたるねん』、『鉄拳』、『王手』、『トカレフ』…
一貫して"闘う男"を描き続ける映画監督・阪本順治。
その彼が再び大阪を舞台に、メガフォンをとった。
題材に選んだのは元世界バンタム級チャンピオン
"浪花のジョー"こと、辰吉丈一郎！
ドキュメンタリーで肉薄する辰吉の素顔、
ドラマで活写された大阪の街並、風、そして辰吉に熱狂する人々。
何故辰吉に惹かれるのか？
何故これほどまでに大阪の街にこだわるのか？

取材・文／今江ユリ　写真／HARRY'S EYE　協力／株式会社オフィス100%

どついたるねん

高校の頃から通天閣界隈で映画を撮りたいと思っていた。

寡黙である。冗舌に理想を論じるのでもなく、熱く自作の解説をするでもなく、相手の出方をじっくりうかがうような鋭い寡黙さ。まるで『王手』の真剣師（賭け将棋師）を思わせる。故に"映画の勝負師"と呼ばれるのだろう。一貫して"闘う男"を描き続けてきた阪本順治監督の少年時代は、やはり映画の主人公にも似て喧嘩に明け暮れる日々だったのだろうか？

「不良はしてませんよ、僕は（笑）。体弱かったですからね。出身は堺市なんですが、家の前に東映の映画館があって、毎日菅原文太とかの看板見ながら学校に行っていました。高校の時は友達いなかったですからねえ。いつもひとりで堺から難波に映画観に行っていたんですけど、途中前方手前に通天閣が建っていて難波の手前で駅降りてパーッと行ってみた。そしたら面白いと思ったんです。道行くおっちゃんはみんな僕同様にぶらぶらひとりで歩いている。その頃から『ここで撮影できたらええな』と思っていましたね。僕は映画観て感想文書いてみたいな映画おたくじゃなくて、『どんな話がおもろいやろか』と、そんなことばかり考える方でした」。

理論より実践を先ず考えるところが阪本監督らしい。地に足が着いているのだ。大学入学のため、関西を離れ関東へ。大学在学中に石井聡互監督の『爆裂都市Ｂｕｒｓｔ Ｃｉｔｙ』に美術助手として初めて映画の現場に参加したことを皮切りに、映画に関するあらゆる仕事に就いた。

「3年間ほど美術助手、6年間助監督をやりましたけど、専門というより何でもやった。制作助手やったりお茶汲みやったり、アニメの編集でも裏ビデオの仕事もしましたよ。自主映画で認められて監督になる人はそれはそれでいいと思うんですが、僕は映画の現場は経験しておいた方が良いと判断してやっていました。映画が『よーい、スタート！』で始まる前に、各パートがどういう仕事をしてひとつのシーンを作っているのか知っていないと、監督していても即対応できないことが多いから。特に町場で映画撮る時は。あと映画監督の仕事の半分以上は人間関係の調整ですよ。スタッフ同志派閥が出来て、お互い悪口を言ったりする。実りのある喧嘩だったら良いけれど、そういう中で良いもの作れるわけない。これを映画の方へうまく向かわせてやるためには、やはり沢山の現場を知っておいた方が有効的だと思いますね」。

日本映画が全盛の頃は俳優、監督からスタッフにいたるまで（一部を除き）専属で働くのが基本だった。映画監督志望で映画会社に就職すれば、（会社によって多少異なるが）助監督、予告編の監督など様々な仕事を経験させられてから監督として一本立ちするというコースが確立されていた。だが各映画会社の撮影所が機能していない現在は、殆どのスタッフがフリーランス。つまり映画の現場があるごとに召集される遊軍みたいなものだ。そんな中で阪本監督は地道にシナリオを書き、チャンスを狙っていたが、その多くは映画化にいたっていない。唯一映画化された作品が『凌辱！制服処女』（85 新東宝。福岡芳穂監督。福岡監督、小水一男と共同で脚本執筆）で、これはデビュー前の阪本順治を知る上でも貴重な作品といえるだろう（笠倉出版よりビデオ発売中。ただしセルビデオのタイトルは『処刑！ 制服処女』）。

どん底に堕ちてから復活、再生、というのがないと、映画は面白くない。

そしていよいよ89年『どついたるねん』でデビュー。久々の若手実力派監督の登場でおおいに注目され、その年の映画賞を総なめにした。以降、『鉄拳』（90）、『王手』（91）、『トカレフ』（93）と、コンスタントに秀作を発表している。だが、そのどれもが"闘う男の挫折と再生"がテーマになっている。

「しょうがないですよ。結局主役（スター）がはっきりしている映画が好きだから。人物から入るわけですよね、『この主役はどうするか』と。その主役を考えるとどうしても自分の憧れでもあるわけやから、憧れの対象というのがどうしても同性になってしまうんですよ。だからホモだとか噂をたてられる（笑）」。

映画監督の中には男を描くことが得意なタイプ、またはその逆のタイプとそれぞれある。男の映画が得意な監督として、日本では黒澤明、アメリカではサム・ペキンパー（代表作『ワイルドバンチ』、『ゲッタウェイ』など）、ドン・シーゲル（代表作『ダーティーハリー』、『突破口！』など）といったところがいる。

阪本監督も男性映画監督の系譜に位置付けられるのだろうか。

「僕が助監督しながら書いた脚本は6本ぐらいありますけど、全部自分のために書いたホンで6本中5本は女性が主役だった。ですからその志向は僕の中にずっとあって、デビューしたのが『どついたるねん』という男にしかできないスポーツを扱った男の映画の最たるものだったんです。その勢いで映画を撮っていって『王手』まで来ちゃった。それでもうレッテル貼られているようなものです。でも、本当は女の映画もやれるんですよ。そのうちレッテル貼ったり『ホモだ』と噂している連中があっと驚くようなヤツ、撮ってみせますから（笑）。男を真ん中に置くと、その主人公が破天荒であればあるほど周りにいる配役、相手役の女もそいつのためにしか動かない。これに女を真ん中に置いたら女はもっと自由に動いて、男はある役割を持って映画の中で動くというだけなんですけど、誰も納得してくれない（笑）」。

インタビューが進むにつれて少しずつ表情が柔和になるが、語り口はあくまで慎重である。言葉のやりとりの中で緊張と緩和が交互

鉄拳王手

阪本順治 インタビュー

に訪れる。それは阪本監督の作品群が"明るい作品"と"暗い作品"とみごとに分かれるように。敢えて分類するなら"明るい作品"の部類に『どついたるねん』、『王手』。"暗い作品"に『トカレフ』。その中間に位置するのが『鉄拳』といったところか。

「まあ、"明るい"、"暗い"の差はありますね。生理としてはやはりハレとケというのがあったとしたら、両方やっていかないと自分のバランスが取れないから。基本的には暗い人間ですよ、僕は。『どついたるねん』でも最終的には傷を負ったり命懸けとか、『鉄拳』はもっとひどいかたちで一度どん底に堕ちてから再生とか復活がありますからね。それがないと面白くないという考えが自分の中にありますから。ただ『どついたるねん』と『トカレフ』は全く違うようで僕の中では少しかたちを変えただけで、自分がよく出ていると思います。重たく暗いものを明るく描くことができるというのが、映画の魅力でもありますからね」。

阪本順治監督作品のもうひとつの特徴が大阪である。最新作『BOXER JOE』を含めて5本までの作品の内、3本が大阪を舞台にしている。生まれ育った街を舞台にしての映画作りは、自分の庭で仕事しているようなものだろうと思っていたら、意外な言葉が返ってきた。

「自分の故郷で近いところでやるというのはしんどいんですよ。みんな『楽やろう』と言うけど。地方ロケ行ったら色々な人にご迷惑かけても、終わったら『どうもありがとうございました』でパーッと引き揚げてくれればいいじゃないですか。自分の近場でやっていると、知っている人にエキストラやってもらったりして、終わっても『ほな、さいなら』ではいかないでしょう。その後のフォローしてまわらないといけない。それに大阪人…広くは関西の人ですけど、娯楽に対する眼が厳しいですからね。『こんだけ払ったんやから、ちゃんとしたもの観せろ』というところではシビアですからね。そういう意味では突きつけられるものが大きいんです。時には『これが大阪やと思っとったら大間違いや』ということもよくいわれましたから。でも、しんどいことって好きですから。一番やりづらいところで撮り続けることとか、自分が生まれ育ったところで撮り続けるというの、これはもう僕の宿命ですね」。

気にしいでないと、恐がりでないと、強いボクサーにはなれない。

今回の新作は、バンタム級元世界チャンピオン"浪花のジョー"こと、辰吉丈一郎選手をドキュメンタリーで追ったものに、辰吉を愛して止まない熱烈なファンたちのドラマ(フィクション)を織り混ぜたユニークなもの。再々度ボクシングを題材にした作品だ(『鉄拳』は厳密には異種格闘技戦といえる)。

ご存じのとおり、辰吉選手は網膜剥離～手術成功～国内での試合禁止&タイトル返上という不運に見舞われた。しかし日本ボクシングコミッションの決定を不服とした辰吉は、ハワイで復活戦を行い、みごとに勝利をおさめ、国内復帰へ。そして現世界チャンピオンの薬師寺保栄との日本人王者同志の決戦に臨むことになったのだった。ドキュメントフィルムは、辰吉のハワイ復活戦から、昨年名古屋のレインボーホールで開催された薬師寺vs辰吉戦までを追っている。個人的にもファンであり、5年前から辰吉選手と付き合いのあった阪本監督は、"地獄の底から這い上がってきた"闘う男"辰吉のどこに惹かれ、メガフォンをとったのかをうかがってみた。

「ボクサーというのはただ暗嘩に強いだけじゃなく、"他人に観られてなんぼ"の世界ですからね。観られているという意識の中で

命懸けのことをしないといけないわけで、ただ勝つことだけで意識がいっぱいになってしまうという人は、観ていて面白くない。観られているという意識の中でちゃんと自分を表現し、きれいな部分やカッコイイ部分を出していかなければならないんですよ。彼は映画の中でも言っていますけど、自分の試合を作品を作る意識で闘っているんです。これは口で言うのは簡単だけど、実際ファイト観たら『何だ、このファイトは』というのじゃダメなんです。人に感動を与えるようなボクシングをやることは、試合やパフォーマンスも含めて大変なんですよ」。

去る2月11日行なわれた『第20回おおさか映画祭』で、『BOXER JOE』はプレミア公開された。舞台挨拶には阪本監督と辰吉選手が現われ、客席から熱烈な拍手が起った。その時の辰吉選手は白のスーツに黒のシャツとパンツ、首にマフラー、といったいでたち。映画の中でも紫色のシャツと短パン姿で首からゴールドのチェーン(!)、腕にはこれまたゴールドのロレックス(!!)という迫力モノのスタイルでインタビューに応じているシーンがあった。悪くいえば"ヤンキーの兄ちゃん"そのまんまである。

「あれでも地味になったんですよ(笑)。撮影終わった頃から黒とか着だしたりして。それまでは黒の中に30色くらい入っていましたから(笑)」。

いまどき何の気負いもなくヤンキーファッションができ、似合ってしまうのは、辰吉選手しかいないかもしれない。もし彼が小綺麗で爽やかなモデルにでもなれそうなルックスだったら、恐らく大阪人を熱狂させるだけの人気は得られなかったに違いない。

そんな強面の辰吉選手でも、試合の時、インタビューに応じているちょっとした瞬間に、ふっと非常にナイーブな部分を垣間見せる。母親の顔を知らないで育った過去。幼い頃いじめられっ子で、喧嘩に敗けて帰ってきた時、父親に喧嘩の仕方を教えてもらってから勝つことを知ったこと。そして、自らを「気にしい」と分析する辰吉。

「やはり細やかでないとボクシングはできないし、強くなれないと思う。自分の向上心も含めて細やかに気を遣っていかないといけない。気にしいであり、恐がりでないと強くなれないんです。彼がブラウン管やスポーツ新聞の取材とかでポーズつけて息巻いたり、昔モハメッド・アリがやったようにホラ吹いたりとか、生意気と呼ばれても敢えて観てくれる人を喜ばせるようにしてしまう。実は彼、自分のテリトリーにズカズカ入って来られることをすごく嫌う人で、逆に自分の方からポンポンと言い放って距離を保っていかないと不安でしょうがない人だと思うんです。だから、オープンなようでいて実は閉じているというか、彼のそういうところに興味持てますね」。

他人の目を気にする、恐がることにも強者、弱者の差はない。観客はそんな恐怖心と背中合わせで闘う辰吉に、思わず自分自身を投影してしまうのだろう。

辰吉のボクシングは華麗できれい。赤井のボクシングはとにかくKOで倒す。

一方、辰吉選手と気質的にも対照的なキャラクターが、ボクサーから俳優へと転向し成功をおさめている赤井英和だ。赤井と辰吉の違いはどこにあるのだろうか。

「赤井君の場合は、辰吉君と同じ減量という課程を踏まえてリングに上がるという肉体的辛さは一緒だけど、ボクシングに対する考え方は圧倒的に違っていたと思いますね。赤井君のボクシングは、とにかく相手をKOで倒すと。お客はそれを喜んでくれればいい。赤井君の方は、所謂テクニック的な向上心というのはあまりなかった。辰吉の場合はそうでない。彼の理想としている華麗できれいなボクシングがまず第一目標であって、練習する時もコーチが『こういう練習しろ』と言ったら、『なんで?』と聞く。『その練習したら上腕の筋肉が鍛えられるから』と答えたら、また『そうしたら何が良くなるの?』と質問する。コーチが『スピードが出る』、『わかった、やる』という具合に、全部納得しないとやらない。他にも重心の置き方、鍛えた方が良い筋肉と鍛えない方が良い筋肉、自分の体形や骨格を知るとか、そういう絶え間ない探求心で突き詰めないと気が済まない性質なんです」。

映画を観ていると、辰吉選手がただ不良あがりでハングリー精神で闘っているだけの人間でないことがうかがえるのも、実はここにある。彼は聖職者にも似たストイックさでボクシング道を極めようとしている人間だ。彼のファイトシーンを観ていると、"闘うこと"と"祈り"という一見相反する事柄が、実はひとつであるという想いに駆られてくるのだ。辰吉は闘う。チャンピオンの座に返り咲くことを祈りながら。ドラマに登場する宇崎竜童扮する"ガンさん"やその友人たちも、辰吉の試合を観るため日々の生活に追われつつ辰吉の勝利を祈って止まない。

「こてこてのフィクションでドラマ作っても、どこかで接点が持てないと。そういうのをどこで持たせるかが一番しんどかったですね。今回は初めて電通から仕事の依頼を受け

トカレフ

阪本順治 インタビュー

たのですが、比較的自由にやらしてもらいました。ただひとつ、『明るく、元気になる映画』を、という注文だけありましたけど。これだけは向こうが言っていることと僕が考えているものとでは多分違うだろうな、というのはありましたね」。

撮れば撮るほど不思議なところ―大阪。

ここでドラマのストーリーを簡単に紹介しよう。大阪の下町にあるお好焼き屋のガンさんや友人の喜一（國村隼）、隣の提灯屋の孫・清（金元気）は大の辰吉ファン。彼らは辰吉の試合は生で欠かさず観てきたが、ハワイでの復帰戦まではさすがに行けず、くやしい思いをしていた。ガンさんの勝負癖のせいか町内会役員の山岡（笑福亭松之助）から借金もしている。今度こそはたとえ海外だろうと行ってみせると決意したガンさん。俄然商売に身を入れ、"辰吉焼き"なる新メニューを開発したりと、ますます生活が辰吉一色に染まっていく（余談だが、ガンさんの店は守口市に実在し、映画のために作られた"辰吉焼き"も、今やメニューにちゃんと載っている！）。それを冷ややかに傍観していたガンさんの娘・ユウコ（黒谷友香）は、恋人と暗躍して帰ってきたある早朝、ジョギングに励む辰吉選手と偶然すれ違い、その真摯な姿に心惹かれる。それからユウコも店の前でかき氷を売って父を助け、次第に辰吉ファンになっていく。そしていよいよ12月4日、名古屋レインボーホールでの試合の日が訪れるのだが、清の祖母の突然の死で名古屋行きはキャンセルに。通夜の夜、それでも4人はこっそりテレビを持ち込み、試合を観戦するのだった…といった内容だ。

確かに一般的な意味での『明るく、元気になる映画』の要素は少ない。おまけに辰吉の方も試合で敗けてしまう。にも関わらず、この映画は観る人の心に力を与えてくれる。映画を観終わった後、思わず自分が辰吉選手にでもなった気分で映画館を後にできそうな、そんな作品だ。かつての東映仁侠映画の健さんや文太兄い、鶴田浩二に魅せられた若者たちが、健さんの歩き方を真似て映画館から出ていったように。

「そういう気分で帰ってもらったらこっちの勝ちですからね。明るく、元気なはずなのに最後おばあちゃんが死ぬというのは絶対に変だけど、それでも僕は大丈夫だと思って設定したんです」。

何事にも不運や挫折はつきもの。だが、それを乗り越える機会がいつか巡ってくるのも人生。どんな些細な日常にも挫折と復活のドラマはあるのだ。

テーマソングが景気良く流れだし、タイトルロールが辰吉選手のトレーニング姿にかぶって写される。カメラが片付けられるリングの青コーナーに寄っていき、そのまま終わるかと思えば、再び辰吉選手が登場する。「『あしたのジョー』の逆で、『ジョーのあした』はどうなりますか？」の質問で、「あしたは…水曜日ですよね」とボケてみせる辰吉。同じボクシングを描いた『どついたるねん』や『鉄拳』と違い、ドラマに終わりはあるが、現実（ドキュメンタリー）にはエンドマークはない。スクリーンを離れても辰吉の闘いは続くだろうし、ガンさんの日常もどこかで続いていくに違いない。実に前向きでしたたかなエンディングである。

三作続けて大阪を撮り続けた阪本監督の"あした"には、どんな作品が出来るのか、最後にうかがってみた。

「撮れば撮るほど不思議なところですからね。特に通天閣のまわりとか。撮っていくごとに、わかっているようで全然わかっていないなと痛感するんですよ。今度は大阪を舞台にしたファンタジー物を撮ってみたいですね。大林（宣彦）監督の『尾道三部作』の向こうをはって、『通天閣三部作』とか（笑）」。

「BOXER JOE」は4月下旬より全国ホール及び劇場にて公開予定。

BOXER JOE

PROFILE

阪本順治

1958年（昭和33年）10月1日生まれ。大阪府堺市出身。実家の前に映画館があったことから幼い頃より映画に親しむ。横浜国立大学在学中に石井聡互監督の『爆裂都市Burst City』に美術助手として参加したことから映画の道へ。川島透監督、井筒和幸監督などの作品で助監督として参加。同時に自主制作で短篇、中編作品も作り続ける。'89年『どついたるねん』で劇場用映画の監督としてデビュー。同作は日本映画協会新人賞、文化庁芸術選奨文部大臣新人賞、ブルーリボン最優秀作品賞など多数受賞。以降、『妖怪』（'90）、『王手』（'91）、『トカレフ』（'93）と次々に秀作を発表。日本映画の"勝負師"にふさわしく、骨太な作風で映画ファンを魅了し続けている。